

2017年3月11日
同志社大学今出川キャンパス至誠館
上智大学グリーンケア研究所所長
島蘭進

同志社大学今出川キャンパス至誠館
上智大学グリーンケア研究所所長
島 蘭 進

ISBN 4-19-008838-9
CDD47 W633 J3
9 784008 283549

定価：単行本980円（税別）

人間が自らの寿命をコンピュータでコントロールする時代が訪れたとき、人間何歳まで生きることが許されるのか？
「金銭の技術」を手に入れたとき、私たちは人間は、これから、どう進んでべき道を決めていけいけのだろうか？

本書の主な内容

第一章 「人間の寿命は300歳まで延ばせる」は本当か？
第二章 人類が抱えている「寿命」の課題
第三章 ギャム理論の登場と「人間の寿命」の算出
第四章 日本人は寿命をコンピュータで管理できるのか？
第五章 ギャム理論と人間の未来



愛媛県庁から「生活文化情報」を毎月お届けします。

いのちの 始まりの 生命倫理

鳥岡 進

FOREIGN AFFAIRS REPORT

フォーリン・アフェアーズ・レポート

合成生物学の ポテンシャルとリスク

一人の遺伝子をもつ複製人間、その大量生産
「合成生物学」のポテンシャルとリスク

「合成生物学」は、生物の遺伝子や細胞を設計・構築し、新たな生物機能や製品を生み出す技術。その応用範囲は、医療、農業、工業、環境など、幅広い分野に及ぶ。しかし、その発展に伴って、倫理的・社会的な課題も浮き彫りになっている。本稿では、合成生物学の現状と未来について、専門家の視点から解説する。

クールのメスマン 「合成生物学」がもたらす世界

中国の労働者はどこへ消えた？
「合成生物学」のポテンシャルとリスク

グリーンエネルギーの真骨頂？
「合成生物学」のポテンシャルとリスク

米原油輸出の自由化を
「合成生物学」のポテンシャルとリスク

アフリカの石油と資源の争奪
「合成生物学」のポテンシャルとリスク

[illegible]

◇何がもたらされるか分からない「ナノの夢」の魅惑も「聖なるものの刻印」を帯びている。原子力安全「神話」のことを思いだしてもいいだろう。だが、それらの聖性は十分な統合力をもつことはない。近代的な科学技術や他の諸システムが、限られた時空の聖性を再生産し続けながら何とか生き延び続けようとしている危うい「宗教」的なものだ。だから現代社会は「脱聖化」による解体の不安にとりつかれており、それがまた疑似超越的なものの再生産を促すことになる。

デュピュイはこのような現代文明のとらえ方を、『暴力と聖なるもの』等の著者、ルネ・ジラルドと『脱病院化社会 医療の限界』等の著者、イヴァン・イリッチから学んだと述べている。また、ハンナ・アレント、ギュンター・アンダーース、ハンス・ヨナスという3人の「ハイデggerの子どもたち」に負っているものが多いことも度々述べられている。これらの著者たちが論じていることの一つは、「**悪の不可視性**」ということ。

また、デュピュイは破局を遅らせるための賢明さを、暴力を避けようとするキリスト教の宗教性に求めようとしている。

2) 唐木順三

◇『「科学者の社会的責任」についての覚え書』

ちくま学芸文庫、2012年1月、初刊は1980年。

◎島藺・解説「人間の顔を持った科学へ」

◎唐木順三(1904-80)

『現代史への試み』、『無常』

(いずれも筑摩書房)など。

◎「科学者の社会的責任」

☆1957年4月～60年3月、

『信濃教育』に連載。随想集

『朴の木』(1960年)に収載。

☆57年7月に開催されたバグ

ウォッシュ科学者会議の

声明を話題にしたもの。

「科学者の
社会的責任」
についての
覚え書

唐木順三

最悪の事態を
なぜ防げなかったのか

ちくま学芸文庫

(2012年1月1日現在)

◇『「科学者の社会的責任」についての覚え書』

◎死を前にした1979年春から夏にかけて執筆。

◎臼井吉見「あとがき」(初版)が、唐木の日記から執筆過程を再現。

◎3月6日:ハイゼンベルク『自然科学的世界観』の最終章「諸国民の和協のための手段としての科学」。「必読、何度でも読み考ふべし」と。

◎3月31日、4月2日:スリーマイル島の原子力発電所事故の報に憂慮。「それみたことがと思ふと同時に、早く修復がかなふことを願ふ」。

◎同時期に『われらの時代に起つこと——原爆開発と十二人の科学者』を読む。エンリコ・フェエルミらのオブティミズムにあきれてもいる。

◎著名な物理学者が「科学者の社会的責任」についてどのように考えていたかを検討、それぞれに独自の評価。

◇唐木は背後に文明史的・歴史哲学的な問題があると考え。

◎唐木はこれは世界観として統一性がなく不十分。科学そのものが罪をはらんだものであることの認識が欠如している。

◎「科学は不可逆的に進歩するもので、それは自由に発展するのが当然で、そこに制限を加えるべきではない。問題なのは科学をどう用いるかということであり、そこで歯止めをかければよい」——科学の実情に合う?

◎知ることと用いることは、実際には分離しがたい。

◎唐木が求めているのは、**真を善・美と調和させること、すなわち科学を世界観・倫理観や人類の幸福という目標と調和させること。**

◎「科学者の社会的責任」はそこにこそあり、科学の「外」で「平和」を求める活動をするだけでよいはずはない。

II. いのちの始まりの生命倫理の枠組み転換



2008年2月1日



2008年2月18日

◇フランシス・フクヤマの東アジア脅威論

「たとえば、アジアでは、西洋で理解されているような宗教——つまり、超越的な神に由来する信仰体系を持つ宗教——がない国が多い。中国で支配的な倫理体系は儒教だが、これには神という概念がない。道教や神道のような民俗宗教はアニミズム(animism)であり、動物(animal)と生きていない(inanimate)物質の双方に霊的な性質があると見なしている。

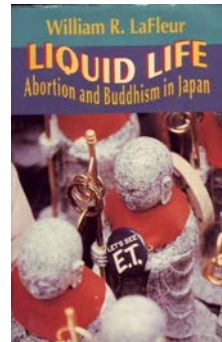
「仏教では人間と人間以外の自然を区別せずとも断絶のない宇宙の一部だと見なしている。キリスト教と比べた場合、仏教、道教、神道のようなアジアの諸伝統は、人間とそれ以外の被造物との間に明確な倫理的区別を立てない傾向がある。(中略)しかしこれは裏を返せば、人間の生命の神聖性(sanctity of human life)に対して敬意を払う度合いが、何ほどか低くなることを意味する。アジアの多くの地域で、実際、中絶や幼児殺し(とくに女児)といった慣習が広まっている。」

人間の生命の特別の地位と生命増殖

◎神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。／神にかたどって創造された。／男と女に創造された。／神は彼らを祝福して言われた。／「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」(創世記1-24, 28)



1992年



2006年



1996年



1983年



2016年

- 「子供の生まれかわりの信仰の背景には、以前にも述べたように、かつて日本人の間には一人一人の人間の個性よりも、ある「家」やある土地に生まれ、一定期間の人生を生きて死んでゆく者は、一つの大きないのちのプールのようなものの中から、ある時間帯だけこの世に生まれ出て来て、死ぬと、またそのいのちのプールに帰るとでも比喻できるような、個人のこの世での生命を強調しないいのちの観念があった。」
- 「生まれてすぐに死んだ子供の名前をその後数年を経ずに生まれた子供にそのまま付けることがかつて頻繁に行われた。あるいは幼くて死んだ子供の葬式は行わず戒名も与えなかった地域が全国で見出され、その理由を、「すぐに生まれかわるように」といっていたことなどを考え併せると、いのちを個別のものとする傾向が小さかったことをうかがわせる。」

- 「私が訪れた家の、世帯主の父親に当たる人はその頃六〇歳代半ばだったが、インタビューのあと支度をして山へ出かけるという。それは桜の苗木を山に植えるためであった。その人は、自分の家の前の「マエヤマ」(家の正面に立った時に見える山の風景あるいは山そのもの)に見える桜の木は、自分の祖父が植えたものであり、今後生まれてくる孫や曾孫の代の人々が自分の植えた満開の山桜を楽しめるように、今のうちに桜の苗木を植えておくのだと言った。」

- 「限りあるいのち」をわきまえた上での「いのちの尊さ」の自覚と「いのちの恵み」への感謝
- 日本人の宗教性において見えやすい倫理性
- 「いただきます」「ごちそうさま」「もったいない」「おかげさまです」(『宗教ってなんだろう?』平凡社、2017年)
- これも「いのちの尊さ」を守る倫理性の基盤となりうる。

- 「始まりの段階の生命(いのちの初め)」への介入の何が問題なのか?

◎〈いのちの破壊〉と同時に、〈いのちの「拡充」〉が何を起こしうるかという問題。

◎何が起こりうるか→未来の可能性の問題。

☆これは、環境倫理ではつねに問われる問題。

☆ところが生命倫理ではスキップされる傾向がある→思考枠組みの再考が必要では?

☆中絶で問われてきた問題の再考。

◎「新しい優生学」「デザイナーベビー」

☆再生医療がもたらすいのちの「拡充」を問う。

☆いのちの「拡充」⇔被贈与性(いのちの恵み)

という観点

III. 増進的介入(エンハンスメント)はなぜ危ういのか？

◇増進的介入(エンハンスメント)の是非という問題

◎増進的介入(エンハンスメント)

——治療(トリートメント、キュア)に対置される。
病気を治療するのが元来の医療の目的だとすると、現代医療は「治療を超えて」心身の「改善」に介入するものに転換。

◎『治療を超えて』が取り上げる諸領域

- (1) 「よりよい子どもを得ようとすること」
(産み分けや子どもの集中力増進)
- (2) 「すぐれた技能を達成するために」
(スポーツにおける能力増進)
- (3) 「不老の身体」 (老化防止)
- (4) 「幸せな魂」
①記憶の操作
②気分(mood)の操作

レオン・カスの答

「能力が向上し、より強く、より幸福になるかもしれないが、しかし、どのような道筋でそうなったのか当人には分からない。当人はもはや自己改造の主体ではなく、改造力のお客さんである。事実、ある成果が何らかの外的介入の結果として生じたものである限り、その成果は、それが自分のものだと呼んでいる主体から切り離すことができる。個人が主体とならずに得られた「個人的な成果」は、本当はその人物の成果とは言えないのである。計算するのに計算機が使えるという事実が、当人を計算の達人にしてくれることはない。脳に埋め込まれたコンピュータ・チップが物理学の教科書をダウンロードできるようになったら、それで当人は物理学の鉄人ということになるのだろうか？」
(356ページ)

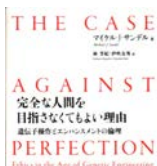
・個人の主体性を重んじる立場からの議論とそれへの批判

- ・「こうしたサイボーグ選手が行為主体であることはありえないと思われる。というのも、「彼の」達成は、彼を作り出した人物の達成となるだろうからである。この見方に従えば、エンハンスメントがわれわれの人間性を脅かすのは、それが人間らしい行為主体性(agency)を蝕むからである。その行き着くところは、人間としての自由や道徳的責任とは相容れない、完全に機械論的な人間行動理解である。

この説明に対しては言うべき事柄がたくさんある。私見によれば、エンハンスメントや遺伝子操作の主要な問題点とは、それらが努力を台無しにして人間らしい行為主体性を蝕んでしまうことではない。」 p. 29-30

- ・「それよりもいっそう深刻な危険性は、それらが一種の超行為主体性(hyperagency)、すなわち、人間本性も含めた自然を作り直し、われわれの用途に役立て、われわれの欲求を満たしたいという、プロメテウスの熱望(Promethean aspiration)の現われとなっていることにある。問題となるのは機械論への漂着ではなく、支配への衝動である。そして、支配への衝動が見失っており、破壊すらしかねないのは、人間らしい能力や達成に備わっている被贈与的性格への理解である。」

p. 30



- ・「生の被贈与性(giftedness of life)」を承認するということは、われわれが自らの才能や能力の発達・行使のためにどれほど努力を払ったとしても、それらは完全にはわれわれ自身のおこないに由来してもいなければ、完全にわれわれ自身のものですらないということを承認することである。また、それは、世界のありとあらゆる事柄が、われわれが欲求し(desire)たり考案し(devise)たりするために用いられてよいわけではないということを認めることでもある。」 p. 30

- 「生の被贈与性が正しく理解されるならば、プロメテウスの計画には制約がかけられ、ある種の謙虚さが生まれる。それは、部分的には、宗教的感性である。だが、それは宗教を超えたところにまで到達し、共鳴を呼ぶ。

何らかの種類のこうした発想に依拠しないかぎり、われわれが人間らしい活動や達成の何を称讃しているのかを説明することは難しい」。

(ところが)

「われわれは、成功とは、スポーツにせよ人生にせよ、努力して勝ち取るものであって受け継ぐものではない、と信じたがっている。自然な天賦の才やそれに向けられる称賛は、能力主義的な信条を当惑させる。」 pp. 30-32

- 「確かにわれわれが友人や配偶者を選ぶときには、魅力的と感じられる性質に基づいて選択がおこなわれる側面もなくはない。だが、われわれが自分の子どもを選ぶということはない。子どもの性質は予測不可能であり、親がどれほど念入りに事を進めようとも、自分の子どもがどんな子どもなのかについて完全に責任を取ることはできない。だからこそ、子どもの親であることは、他のどのような人間関係よりも、神学者ウィリアム・F・メイの言う「招かれざるものへの寛大さ」(openness to the unbidden)」を教えてくれるのである。」 pp. 49-50

- 「メイの含蓄に富んだ言葉が意味しているのは、支配や制御への衝動を抑制し、贈られもの(授かりもの、恵み・島嶼)としての生という感覚を呼び覚ますような、人柄や心持ちである。それは、われわれに以下の事柄を教えてくれる。すなわち、エンハンスメントに対するもっとも根源的な道徳的反論は、エンハンスメントの先にある人間の完全化よりも、エンハンスメントが具現したり促進したりする人間の性向に向けられている。問題となるのは、親が設計によって子どもの自律を奪うことではない(設計されなければ、子どもが自分の遺伝的形質を自ら選び取れるというわけでもなかろう)。」 p. 50

「むしろ、問題の所在は、設計をおこなう親の傲慢さ、生誕の神秘を支配しようとする親の衝動のうちに認められるのである。むろん、このような性向があるからといって、親が子どもに対して暴君のように振る舞うことにはならないのかもしれない。だが、こうした性向によって親と子の関係は汚され、招かれざるものへの寛大さを通じて育まれるはずの謙虚さや人間に対する幅広い共感能力が、親から奪い取られてしまうのである。」 pp. 50-51

「限られたいのち」の自覚が乏しく、「いのちの尊さ」を軽く見て、「いのちの恵み」を見失う傲慢さ。

IV. 個のいのち、 つながるいのち



- 第二次世界大戦後は作家修業を始めるとともに、印刷関係の仕事をするなどして、稼いだ金で家建てて、母親と暮らしました。しかし1949年、その母とじが肝臓がんで亡くなります。72歳でした。42歳の1956年に発表された『檜山節考』は、この母をモデルとしていると言われています。

いよいよ檜山へ登る夜、おりんはにぶりがちな辰平を鼓舞して檜山まわりの途につく。「檜山に近づくにつれて辰平の足はただ一歩ずつ進んでいることを知っているだけだった。檜山が見えた時から、そこに住んでいる神の召使いのようになってしまい、神の命令で歩いているのだと思って歩いていた。そうして七谷の所まで来たのである」。そこから先は檜山で、もう道がない。辰平はいよいよ檜山に来てしまったので、もう口をきくことはできないぞと決心する。「おりんは家を出てから何も云わなかったのである。歩きな

がら話しかけても返事をしないのであった」。そして、とうとう頂上らしいところまで来る。おりんは辰平の肩を叩いて足をバタバタさせる。



辰平がその役目を果たし、檜山の中程まで降りてきたとき、目の前に白いものが映ります。雪が降ってきたのだ。普段、おりんが「わしが山へ行く時アきつと雪が降るぞ」と力んでいたその通りになった。雪は次第に強くなっていく。辰平にとって、それは神か仏か、あるいは大いなる何かが、おりんを清らかで安らかな彼方の世界へと運ぼうとする証拠と思われたのではないだろうか。

辰平は猛然と足を返して山を登り出した。山の掟を守らなければならない誓いも吹きとんでしまったのである。雪が降ってきたことをおりんに知らせようとしたのである。知らせようというより雪が降って来た！と話しかけたかったのである。本当に雪が降ったなあ！と、せめて一言だけ云いたかったのである。辰平はましろのように禁断の山道を登って行った。

「おっかあ、雪が降ってきたよう」／おりんは静かに手を出して辰平の方に振った。それは帰れ帰れと云っているようである／「おっかあ、寒いだろうなあ」

おりんは頭を何回も横に振った。その時、辰平はあたりからすが一びきもいなくなっているのに気がついた。雪が降ってきたから里の方へでも飛んで行ったか、巣の中にでも入ってしまったのだろうと思った。雪が降ってきてよかった。それに寒い山の風に吹かれているより雪の中に閉ざされている方が寒くないかも知れない。そしてこのまま、おっかは眠ってしまうだろうと思った。

「おっかあ、雪が降って運がいいなあ」／そのあとから、／「山へ行く日に」と歌の文句をつけ加えた。

おりんは頭を上下に動かして頷きながら、辰平の声のする方に手を出して帰れ帰れと振った。



おりんは集団の存続のため、また、家の名誉のために我が身を投げ捨てたと評価することもできる。そのような観点からの批判も当初から加えられたようだ。

だが、おりんは勇気ある「個」として、「つながりのなかのいのち」を尊ぼうとしたと受け取ってもよいだろう。

ここには「つながりのなかのいのち」を尊ぶ日本社会の倫理性が反映しているのは否定しがたいところだ。

しかし、「つながりのなかのいのち」という観点は、決して日本、またアジア地域に限られたものでもないようです。実際、現代西洋の哲学者マイケル・サンデルがエンハンスメントに歯止めをかけるための鍵となるものとして「いのちの恵み」、あるいは「予期せざるものを受け入れる姿勢」という観点を示しましたが、これらは「つながりのなかのいのち」という観点に通じるところがあるようだ。

また、「つながりのなかのいのち」を尊ぶのはエコロジ（生態学）や環境倫理の分野においては大前提の一つだが、エコロジも環境倫理とともに、西洋的な世界観の中から発展してきた学問であり、倫理思想だった。

どちらも同じように「いのちの尊さ」について考えることを基盤としながら、より直接的に「人間のいのち」を対象とする生命倫理においてはもっぱら「個としてのいのち」に重きが置かれ、「つながりの中のいのち」が軽んじられてきたことは不思議にさえ思える。

そのために西洋社会において、中絶、あるいは脳死による臓器移植をめぐる議論では取り上げられることがなかった。このような観点が、今後、再生医療やエンハンスメントをめぐる議論において重視されるようになっていくのではないだろうか。

ただ、このように述べるからといって、「個としてのいのち」という観点が今後、重要でなくなるというわけではまったくない。

2011年3月の東京電力福島第一原発の事故による福島原発災害では、国や自治体、企業などの集団を視野に入れて総量としてのコストを重視するために、まさにその土地に住み、直接的に被災することになった人々、一人一人の個としてのいのちが軽んじられる傾向がたいへん強く現れたことは、広く知られているとおりだ。

事故後も放射線の健康影響を懸念して避難や移住した人々に対する支援は乏しいものだった。地域の「復興」を優先するために「いのち」を守ろうとする個々人の意志が抑圧されたとして、多くの訴訟が起こされていく。

市場経済が私たちの生活のすみずみにまで及び、「自己決定」が促され、個人主義が強調される傾向が社会のあちこちで強まっているようだが、実は、個としてのいのちはかえって軽んじられていく場面が増大しているようにも見える。

その意味でも、グローバル市場経済が進む現代社会において、政治的、倫理的な観点からは、「個としてのいのち」を尊ぶ、という視点はますます重要性を増していると言える。

また、現在、2010年代の日本では権威主義的な政治が力を強めてきている。さまざまな場面において、言論・思想・報道の自由に対する抑圧がこれまで以上に加えられるようになり、基本的人権は軽んじられ、ついには「個人」という語を排除した憲法改正案が提示されるまでになっている。

政財官界の有力者層が、国家の力に人びとが従順に従うことを強いる姿勢が目立っている。

日本国憲法の第十三条には「すべて国民は、個人として尊重される」とあり、また、第十九条には「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない」とある。

これらは、民主主義社会においてすべての個人の自由と生存権が尊ばれることの重要性を示すものだ。このような文脈において、「個人」がきちんと尊ばれるべきであることは、いくら強調しても強調しすぎることはない。

しかし、個人のいのちの尊さを、また個人として自律することの重要性を強調することは、決して個人を孤立した存在として捉えることを意味するものではない。

すべての個人が尊い存在として扱われるとともに、それぞれの個人が自由で自律的な存在として生きることが目指す、そのような倫理的なあり方としての個人主義は尊ぶべきことだ。

一方で、「個人を尊重する」という言い方で、人びとがつながりをもって生きている事実を軽視して、あたかも相互依存の関係から独立しているかのように見なすのは適切ではない。

それを存在論的な個人主義とよぶとすれば、それは人間の真実のあり方を捉えそこねている。個人が個人として存在するためには、他者や集団、自然や環境との関係が、そして世代を超えた過去や未来とのつながりが必要だ。そうした関係やつながりの働きを明確に捉えることによってこそ、個としてのいのちの尊さを守り、自律的な個人の倫理性を拡充することもできる。

現代の生命倫理をめぐる議論から見えてくることは、倫理的個人主義を尊ぶ、そのような論点をも含んでいる。

個としてのいのちを尊ぶこととつながりのなかのいのちを大切にすることとの間に、葛藤が生じることがあるのは確かだ。

おなかの中にいる胎児のまだ生まれてくる前のいのちを尊ぶことを重視する立場と、その新しいいのちを胎内に宿す女性自身の人権という立場と、人口調節によってつながりのなかでの生活の安定を尊ぶ立場—これらそれぞれの立場の間に対立が生じる、というのがその一例だ。

また、やがて遠からず死に向かう高齢に至った人の生存権を尊ぶ立場と、社会の限りある資源を分かち合うという観点から高齢者のために用いる医療資源を抑制するのを認める立場との間にも、やはり対立が生じることもあるだろう。

ここには「限りあるいのちの自覚」という観点が関わっている。

『いのちを”つくって”もいいですか?』では、「幸福に満ちたいのち」を求める姿勢と「限りあるいのちの自覚」を尊ぶ姿勢を対置した。

現代のバイオテクノロジーは資本主義市場経済に随順し、「幸福に満ちたいのち」を求める意欲に傾きすぎて、「限りあるいのちの自覚」を置き去りにしがちなのではないか。「限りあるいのちの自覚」という観点に立つてバイオテクノロジーの行方を見定めようとするとき、そこには大きな懸念が生じてくる。

何の疑いもなく頼っているバイオテクノロジーが暴走して、いつしか「いのちの尊さ」が軽んじられてしまう。その場合の「いのちの尊さ」には、「個としてのいのち」の尊さと「つながりのなかのいのち」の大切さのどちらも含まれている。

『檜山節考』には、老いた者の孤独と悲しみも深く描かれています。それは、おりんが自らの死を迎える檜山の光景として強く心に刻印される。そのような孤独に押しつぶされることなく、辰平をやさしく励ますおりんの姿は感動的だ。老いた者の慈しみがその深い孤独を超えていく。その慈しみは自らが受けて来たいのちの恵みへの感謝の現われとも言える。

ここに描かれているおりんの悲しみと慈しきは、「つながりのなかのいのち」の自覚とも「個としてのいのち」の自覚とも深く関わっている。そしてこの二つの自覚は不可分のものではないだろうか。そのようなおりんの生き方に心を揺さぶられたからこそ、辰平は村の掟を破っても、おりんに会おうとする。ここにはおりんと辰平の、個と個の魂のふれあいが描かれている。

『檜山節考』は村や家族の限りあるいのちを尊ぶために、ときに個のいのちの存続を放棄することもある世界を描いた物語とも言えます。しかし、それはまた、おりんや辰平がお互いの個としてのいのちを尊び合う生き方を印象深く描き出す物語でもある。この物語は、限りあるいのちの自覚を通して、人は「つながりのなかのいのち」の自覚と「個としてのいのち」の自覚の、双方を深めていくものだということを教えているようにも思える。そして、これは日本人の読者だけに納得されるものではなく、世界各地の人々の心も揺さぶるものだろう。

このように考えていくと、文化の違いや歴史的経験の違いによって隔たり合っているかに見える生命倫理の考え方が、深い次元まで降りていけば共通の地盤が見えてくることがあるとも考えられる。他方、超えがたい異質性が露わになることもあるだろう。だが、その場合も妥協による合意は可能だろう。日本(宗教)から発信すべきなのは、そのような共通基盤と異質性の認識に基づく倫理性なのではないだろうか。